

鹿

ならのしか 奈良の鹿

神主・奈良県立大学客員教授

岡本彰夫

Akiyo OKAMOTO



お幼名と・あきお
1954 (昭和29) 年奈良県
生まれ。國學院大學文学部
神道科卒業後、春日大社
に奉職、春日大社権宮司
(2015年退職)。奈良県立
大学客員教授、宇賀志屋
文庫庫長。著書に『日本
人よ、かくあれじ』(ウェッジ)
など多数。

文暦元年(1234)の具注暦の紙背に記された

『古社記』に、「常陸国より御住處、三笠山に移りたもふの間、鹿を以て御馬と為し、柿木枝を以て鞭と為し御出あり」とある。古来春日大明神の神使とされてきた「神鹿」は、春日大宮第一殿の御祭神が遠く常陸国(茨城県)鹿島の宮(鹿島神宮)より、「大神の乞はし賜ひの任に」(大神の御心によつて)『延喜式』春日祭祝詞)鹿に御され、つまりお乗りになつて、柿の木枝をムチとして、大和国の御蓋山へとお越しになつたというのが、春日大社の成立なのである。

この鹿が白鹿だつたという事は、文永六年(1269)の『中臣祐賢春日御社縁起注進文』(興福寺一乘院門跡信昭の下問に対し若宮神主中臣祐賢が答えたもの)の中に「御体御束帯令乗三疋乃白鹿御座」とある事で、古くから神

鹿は白鹿であると認識されていたことがわかる。

この白鹿自体は古来祥瑞とされていて、『延喜式』の治部省式の祥瑞の条に大瑞・上瑞・中瑞・下瑞とある中に、上瑞に位置づけられている。そもそも鹿という動物は、夏冬毛色が変化し、

角は毎年生え替わつて、袋角から硬化して行くから、月々に姿態は変化する。ゆえに再生を髣髴させ、また微音をも聴取する能力を持つ動物であるから、神意を取り次ぐ神獸として、古代より行われた「太占」にも、鹿の肩骨が使われる等々、神聖な動物とみなされて来た。

かくして千有余年来、奈良においては鹿を崇め、その保護に尽力して今日の容相を呈しているのであるが、殊更に飼育している訳でなく、あくまで野生の存在である。他所から来られる観光客が、鹿による事故に遭われるのも、これが

野生であるという認識に欠けることが大きな原因ともなっている。

つらつら考えてみると、神仏と自然と人間と動物が調和するという、世界にも稀な景観を保持しているという現状は、世界の環境問題に範を垂れる存在だと誇らしく感ずる。これは、お互いに辛棒しつつ、譲り合いつつ、均衡を取ってきた、苦難と努力の歴史を積み重ねて来た結果に他ならず、そう容易くなし得たことではないのであつて、その努力の成果として、世界に誇る景観を呈していることを重く受けとめてもらいたいと思う。

ここに掲げる奈良幕末の画家・内藤其淵は、興福寺修南院の役人で幼少より鹿の群に入つて、あらゆる生態を熟知した、名手なのである。



其淵百鹿圖屏風
攝影：岡下浩二